

院の崩壊を招かざるを得ない状態になってしまうこと、などが改めて知らされたおもいである。

新寺建立のむずかしい今日、時には、寺院も人の動きの変化に応じてところを動かなければならぬと感じたのは、実地踏査した者の共通した意見であった。教化拠点のない都市の過密化、一方で農山漁村の過疎化、この変動のますます激しくなる将来、過疎地域の寺院の活性の考えられる方向は、一つは寺号・法人でもよいから移転させて寺院の機能の可能性を求めることにあるのではないかと思うのである。

二、隠岐島寺院調査

久 住 謙 是

(現代宗教研究所調査主任)

隠岐の現状

島根県寺院調査は、その過疎問題を考えるとき、隠岐島を除いては考えられない。

島根県寺院調査の一環として、隠岐島調査は、昭和五十九年五月二十四日(木)から二十六日(土)まで実施した。二十四日、羽田空港を午前七時に発ち、九時三十五分、島後隠岐空港に着き、西郷町A寺および廃絶寺の調査、夕方西郷港から、島前菱浦港へ渡り宿泊、二十五日は、海士町のB寺・C寺の調査および役場・郷土資料館へ、夕方、日

ノ津港から、知夫里島来居港へ渡つて知夫村泊り、二十六日、知夫村D寺および法華経塚、郷土資料館・村役場へ、来居港から西之島浦郷港へ渡る。浦郷港から本土境港へ、米子空港から羽田空港へ、午後七時十分帰着した。

隠岐島は、島根半島の北東約四〇〇八〇^{キロメ}の海上に位置する島前（どうぜん）と島後（どうご）のほか、約一八〇の小島からなる総面積三四八平方^{キロメ}で、人口二万九千余が住んでいる。近海に暖流の対馬海流が流れて気候は温暖であるが、冬は北西季節風が強く吹く。

日本と朝鮮半島の交通を結ぶ島として、歴史・文化は古く、また、古代から江戸時代まで、流刑地となり、約三千人が隠岐に流されたといわれ、後鳥羽上皇や後醍醐天皇のことはよく知られている。

島前は、西ノ島町（西島）・海士町（中島）・知夫村（知夫里島）からなり、島後は、一つの島で、西郷町・都万村・布施村・五箇村の一町三村からなっている。

隠岐島の産業は、四囲海に面し、水産業がもつとも重要な産業で、就業者の約半数以上が従事している。農業は本土ほど耕地に恵まれず、独特な牧畑農法は知られている。専業農家より、兼業農家が多数を占めている。

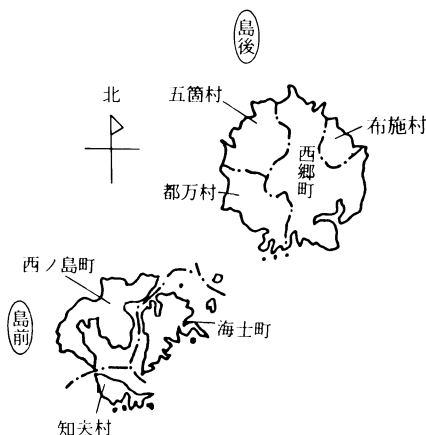
昭和三十八年、隠岐島が国立公園に指定され、本土と結ぶ空路が開かれたほか、大型フェリー・高速船が就航して交通も便利になり、年間二〇万人近い観光客が訪れるようになった。

しかし、隠岐島をとりまく環境はきびしいものがある。昭和三十五年には、人口四万一六三九人であったが、昭和五十五年には、三万九四七八人となり、三人に一人が島を出ていった計算になる。隠岐島全町村が辺地地区・離島地区の過疎指定地域となっている。

働く若者を中心に、本土の島根県、関西・関東方面へ就職している。

農業就労者が、西郷町で九六一一人から三四三九人に、海士町で二一四二人から六八二人に、知夫村で六四八人が

隠岐島



ら六八人（各町村勢要覧による）と激減した。

一次産業従事者が過半数であったが、今は逆転して低率となり、過疎地区ながら、第三次産業のサービス業・卸売・小売業の人口が過半数を占めている。

人口構成は、過疎地特有の逆三角形を示し、高齢者に人口比率が高く、若年層が低い比率となっている。二十四〜三十歳の若者が最も少ない比率である。知夫村は、とくに高齢者比率二五・三％と、日本第六位の高率で知られる老人社会である。海士町の新井地区は、高齢者五〇％、居住者の半数が高齢者という所である。隠岐は典型的な離島の過疎地区であることがわかる。

この隠岐には、島後の西郷町にA寺、島前の海士町大字崎にB寺、同町東にC寺、知夫村にD寺、都合三カ寺で、合計四カ寺が存する。A寺が唯一の住職が常住、B寺は住職名儀であるが、住職は本土の松江市の師範の寺で法務を営みつつ、必要なとき渡島する。C寺は全くの無住寺である。D寺はB寺住職が代務し、二カ寺を担当している。

隠岐は、明治二年、明治政府の神仏分離令が発せられた折、廃仏毀釈の嵐が島内を吹き荒れ、寺院は悉く破却された。日蓮宗四カ寺は、他宗寺院と同様、明治以降建立されたものである。

廃仏の後、改めて開教され、今日の拠点を島前と島後に、それぞれ造立したが、先師の努力にもかかわらず、さきに指摘した通り、はげしい過疎化現象で、辛うじて住職常住寺一カ寺のみとなった。とくに、離島のきびしさが、寺

院をとりまく環境にも感じられた。

また、隠岐は、不受不施派流罪僧二名の流通地としても知られている。岡山県御津郡金川村妙覚寺二十八世であった円院日信上人の墓と庵室跡が島後の元庄屋横地氏宅にあり、総寺院日慎上人の墓が海士町崎の元庄屋渡辺家墓地内に信者によって建てられ、墓石がある。

以下、調査にもとづいて、各寺の実状を報告することとする。

A 寺

A寺は、島後唯一の日蓮宗寺院である。島後には、一町三村ある中に、曹洞宗六、浄土宗五、真言宗二、東本願寺一、西本願寺一、日蓮正宗一、仏立宗一、天理教二、金光教一、大社一のそれぞれの宗派の寺院・教会がある。

隠岐は、明治の廃仏毀釈が最も熾烈を極めたところで、国分寺をはじめ、島内の寺院はすべて破却され、仏像も無惨に破棄されて、国分寺には、当時の仏像が壊れたまま安置され、首なし、胴なしの石像群が祀られている。

明治元年に神仏分離令が發布され、同二年、三年には、隠岐の寺院はほとんど壊滅した。その後に建立し、創立した寺院・教会であり、A寺もその一つに数えられるが、もっとも早い時期に創立されている。

A寺は、島後の西郷町、港に面した中腹にあり、下船して徒歩十分の距離である。

現住職が、地方（じかた＝本州）から渡ったとき、法華經の寺・何々寺と尋ねても、そんな寺はねえぞ、妙見さんなら、この上だ、と言って教えられたという。宗旨や寺名では通用せず、勧請の守護神で知られた寺である。漁師町に栄えた信仰の寺を象徴しているようである。

A寺の開創は、廃仏の嵐が吹き荒れている最中、隠密に渡島した宇中智振上人が、隠岐開教を始めたことによる。僧侶が見つけれたら、殺されてしまう陰悪な状況下であった。追われて、芋蔵に匿われながら、布教を進め、地域

の異なる信者同士が、上人の住むところを引き合い、くじ引きで決め、現住所に掘立小屋の庵室、妙見結社、そして、寺のもとが築かれたという。

現住職が昭和二十一年に来島するまで、何代かの住職が交替し、無住時も長かった。離島での住職常住は、現住職代が最も長く、在職三十一年になる。二十五歳で住職した当時、二カ年間は、正式な住職に就任できなかった。来てはすぐ出てゆく住職が多かったために、定住するかどうか、保留されたのである。

住職不在期間の多い寺であつたため、寺での年中行事が、教師不在、檀徒だけで営む慣習が続いて、住職が入り込める状況ではなく、お供え物一つ、檀家の合議で処理されるなど、十六軒の檀家対象に、きびしい生活を強いられた。本堂屋根修理、壁ぬり、石垣積みなど、寺の維持は、住職自身が何でも手がけた。

寺のお盆法要は、わづか十六軒の施餓鬼でも、五く六時間を費やして、一霊づつ、読経しては回向するという方法がとられていた。

住職が生活するためには、檀家だけではだめだと考え、食うための信者づくりをはじめた。隣りの五箇村に二カ所、信者宅で出張施餓鬼法要を行ない、信者を組織化した。車で一時間のところ、バスも通つてない頃は、豚を積んだトラックに便乗して通った。布教のための信者づくりでなく、食うための信者づくりという言葉には、実感がこもっている。寺の維持は、檀家以外にも支援を受けられるようになって、住職常住の基盤ができた。

現住職が常住することになってから、とにかく、檀家・信者には寺へ来てお題目を唱えてもらうようにする。参拝させることが肝要と、年中行事は、寒行・節分・彼岸会・妙見祭・稲荷祭・盆施餓鬼・法難会・お会式などを行つていくという。毎月の月忌回向は、檀家と一対一で接する布教の大切な機会であるから、これは欠かしてはならないという。たしかに、月忌回向は、全国各地の布教盛んなところは、かならず実施されてはいる。

他宗派寺院住職は、ほとんどが、勤務を他に持ちつつ、法務を営んでおり、住職専住は日蓮宗A寺のみである。それだけに教化はきめ細く、日常の活動が徹底していると思われる。過疎の中で、人口は増加せず、家族も半分位は老人世帯になっているという中で、現在、三十五軒と檀家を増やしている。

住職は、どんな事情があっても、常住しなければ、寺はだめになると断言する。寺は、住職が常住することによって十分に機能することは言うまでもない。

菩提寺住職不在のため、島に居る僧なら、宗旨を問わず戒名を受け、葬儀を営んでもらった。今でも宗派にこだわらぬ風習が残っており、A寺檀家にも他宗の戒名があるという。現住職になってから、はつきりとけじめをつけている。常住ならばこそである。しかし、現在は、檀家の不幸があっても、本土に居る住職が船で通うことも可能な時代になったという。

現住職の悩みは、後継者問題である。二人の子息が、社会へ出て働いているが、法灯を継ぐ意志は全くない。成長期の両親の苦勞、寺の生活が、いかにきびしいかよく知っている。今思うと、坊主になるよう教育しておけばよかったという悔いはあるが、おそらく、本人も帰るつもりはないだろうという。

隠岐唯一の常住寺院も、現住職で終りになりそうである。離島布教も、個人の努力に負っていては、近い将来、無住寺院になる可能性が強い。

B 寺

海士町大字崎にあるB寺は、住職不在である。檀家の法事など、法務のときは、本土松江市から渡島する。最近の船は高速化し、檀家で亡くなったという電話がきても、その日の夕方、通夜には十分間に合うようになったという。

調査班は、前日、島後西郷町A寺から、夕方、島前中ノ島、海士町菱浦に投宿した。崎は菱浦の反対、北側の端、

外海に面しながら自然の良港となっている港町である。昭和三十八年頃迄、境港行の隠岐汽船が寄港していた。崎小
学校も、全校生二十人となり、かつての五分の一となった。昭和五十九年で廃校となる。漁港で栄えた町もすっかり
さびれ、檀家三十軒の内、若者はほとんど居ない。出稼ぎに出て、年寄りが家を守っている、という状態である。現
住職が引き継ぐまで前住の老僧が護持していたが、高齢のため、本土の子息の寺へ引き取られて行った。立派な本堂
が、港を見下ろす景勝地に建ち、誰も居ないのが不思議に思えるほどである。

崎地区は、人口三四五人、その内、六十五歳以上の高齢者が七十四人、二割に達している。

檀家対象の教化活動といっても、老人対象にならざるを得ず、新しく住職が就任したとしても、いわゆる通勤住職
では、先代が常住した活動に及ぶべくもない。過疎地は、対告衆の減少、高齢化、住職の常住から不在へと、悪循環
が続く中で、盆会の法要など、年中行事が営まれているが、膝をまじえた住職対檀家のコミュニケーションは稀薄に
なっている。何よりも、過疎地の人びとにとっては、人との交わりを望み、寺院は、その意味で大きな役割を果たす
存在である筈であるが、現実には、後継者難のとき、住職が居ることでも、恵まれているというべきであろう。

C 寺

C 寺は島前中ノ島海士町東地区にある。近くに町役場・歴史民俗資料館があり、町の中央部に所在している。日蓮
宗寺院名簿は、等外で住職なしとなっている。訪れてみると、道路に面した閑静な所に、本堂と庫裡が建てられてい
た。

長い間、人が住んだ様子がなく、畳は雨漏りで腐り、建物も老朽化して、寺院活動を停止して、放置されたままに
なっていた。

本堂に、住職在住の当時の新寺建立と寺号公称の叙認、建立に協力した寄付者名の一覧表などが掲げてあった。

C寺は、尼僧の教化活動の結果、一代で創建した寺である。町へ出て、うちわ太鼓を打ちつつ、布教して、多くの信者を教化した。

本堂建立寄付者名簿は、隠岐の全島に及び、多数の人数にのぼり、開創者の努力が認められる。

近くの歴史民俗館の館長も、C寺の信者で、その開創者の徳をたたえて、海士町での教化活動の様子が推察された。しかし、創建者の住職が、遷化した後、後継者がなく、その時点で、寺院活動は停止し、無住で今日に至っている。一人の尼僧の不惜身命の努力で新寺を創建させながら、後継者不在の為、下種結縁した教田、有縁の人びとも、教化に浴することなく、寺院の荒廃とともに、離散してしまっている現状である。

弘通の拠点づくりとともに、後継者がいかに重要であるか、C寺は、それを象徴しているといえよう。未開教の開教拠点づくりとともに、拠点を継続して活動を展開させるための地方での法器育成が課題である。過疎地はこの点でもきびしい状況にある。

D寺

D寺は、島前知夫里島、知夫村にある。村の中央部、港に面し、小学校や家並みを眼下に納める丘の中腹の景勝地に、D寺は建っている。

D寺は、現在、前記B寺住職が代務している。本土、松江市で日常法務をしつつ、B寺とともに、D寺の檀家の法務も併せて担当している。三年前まで、住職が常住していたが、遷化した後、無住状態が続いている。住職には僧侶の子息は居るが、本土の他の寺院で住職している。後継の常住々職を求めることは、困難な状況である。

島前の知夫里島が知夫村であり、隠岐の島前三島の内、本土に最も近い島ではあるが、交通の便や産業など、島も小さいこともあって、社会環境としては、最も離島の実状が色濃くあらわれている。隠岐の中で一番の高齢化が進み、

日本で十指に入る、老人の多い村となっている。その背景は、隠岐に共通する働く年齢層が村に留まらず、本土に就職口を求めて、島を離れる状況が依然として続いているからである。

D寺檀家は、約三十戸あり、半農半漁の家が多く、働く人も老人が多く、若者の家族が島に戻ってくることを願っているが、むしろ、挙家離村する例が多くなっている。

現在、小学校・中学校生徒一六人で、年毎に減る傾向にある。中学卒業後、全員高校に進学するため、海士町・西郷町が本土の高校に入る。ために島を離れ下宿生活することになる。このときから、村に就職できないかぎり、村へ戻って生活する機会はない。進学から離村が始まる知夫村である。

D寺は、昭和三十二年、檀家の勧募と他宗の島内替同者、西ノ島町・西郷町などからの浄財協力で本堂を新築した。檀家は七、八軒が廻り持ちで題目講を営んでおり、住職不在の寺院維持や住職との連絡など、総代が中心となって円滑に行っているが、過疎化の進行と共に、新しい本堂が無住の寺となって、一層、淋しさを禁じ得ない。

代務の教師は、B寺住職と併せて、離島布教に努めているが、中ノ島と知夫里島の不便な島めぐりを、とくに冬の北西風が強く吹く海上を渡ることを考えると、陸上でわれわれに想像できないきびしさがある。幸い若さと行動力を具えた教師であることが、頼もしく救いとなっている。

知夫里島の法華経塚

知夫里島知夫村のD寺寺院調査の折、法華経塚の存在が判明した。隠岐は、廃仏毀釈以前の寺院は破却され、それ以前の歴史をさかのぼって知る史料は、石刻の文字を通じて知る以外になかった。島前、西郷町に当時、廃寺となった妙福寺跡と伝える歴代人墓と村落の共同墓地を調査した。元治元年、一一世住職碑が最後で終り、地元下西地区

の墓地としてのみ残り、寺跡は全く認められなかった。

知夫村の法華経塚は、廃仏毀釈以前の宗門僧侶の活動を伝えるものでは、貴重な存在といえる。D寺・B寺の創立渊源も、法華経塚に関わっており、離島における先師の教化の一端を知ることができると思われる。

法華経塚の存在は、知夫村村営郷土史料館に地図と写真入りで紹介されていたが、建碑理由が判明しなかった。塚のあるという一宮神社（隠岐で唯一の歌舞伎芝居の伝播を伝える芝居小屋がある神社として知られている）境内の碑と大江区薬師堂の傍にある碑とを尋ねた。自然石の卵形の正面に、一見して宗門僧侶の筆跡とわかる雄渾な南無妙法蓮華経が刻ってあった。しかし、その他の刻字は、判読できなかった。なぜ、知夫村に法華経塚が随所にあるのか判明しないまま、時間の制限で知夫村を離れた。

調査中、たまたま郷土史研究家の同村在住の渡辺喜代一氏と知己を得、手紙で、法華経塚に関する資料を提供して下されたので、原文のまま、紹介することとする。

『知夫村に在る法華経塚』（渡辺喜代一著）

郡（知夫村内）在住の浪花屋日融という流人で、ある大阪本照寺の住職で、天保十二年に着岸したものである。学問も深く、在住中寺小屋を開いて子弟を教育した。なお、此の島へ一字一石を書いて、所々に十五ヶ所に埋め、法華経塚と云うものを造った。文久二年、閏八月十三日に行年五十三歳で入叙している。英雄院日融上人とある（辞世） 三千年に咲く花よりもしばしだに法の花見る身こそうれしきの辞世を残している。

法華経塚の所在

郡区にあるもの

妙経寺「南無妙法蓮華經日蓮大菩薩」(自然石)

一宮神社(境内)「南無妙法蓮華經一字一石妙塔」(自然石)

野村家墓地内「法華塔」(高さ一二〇cm、自然石)

大上家墓地内「妙法蓮華經」(高さ八〇cm、自然石)

大江区にあるもの

薬師堂地内「南無妙法蓮華經」(自然石)

大江の上墓地内「南無妙法蓮華經」(高さ一二〇cm、自然石)

仁にが夫区にあるもの

南無妙法蓮華經 施主日蓮宗一同

御越(高さ一五〇cm、周り一七五cm、遭難者慰霊)(文字不明)

浅島(高さ一〇〇cm、周り七〇cm)(文字不明)

古海ふるみ区にあるもの

俵島「頂上には御影石に大乘妙典一字一石弘化三丙午建設の石碑あり」(明治三十九年発行の知夫村沿革誌に依る)

薄毛区にあるもの

安藤家井戸の傍「南無妙法蓮華經□□」(高さ九〇cm)

多沢たたく区にあるもの

大般若経堂裏にある(自然石)

その他にもありますが、確証ない為省略致します。(昭和五十九年五月二十六日、渡部調査手帖から摘録)

以上である。さらに、『知夫村誌』による妙法寺縁起の中に、

天保年間、日蓮宗ノ僧、日融故アリテ当国ニ遷リ、知夫に住シ村童ニ読書、習字ヲ教授ス、傍ラ法花経ノ一字一石ヲ書写セシメ、以ッテ知夫村の海陸ニ埋没シテ、難船溺死ノ霊ヲ弔慰シ、大乘妙典ヲ下種結縁シタルニ創マリ、文久二年八月、日融ノ死後、其子浪花周次郎亦法花経ヲ信ジ、亡父ノ遺志ヲ承継ス云云

と記されている。これによつて法華経塚の由来は、天保年間、英雄院日融上人が流人として知夫に住したこと、法華経の一字一石を埋めて法華首題を書いた自然石の題目碑を建てたこと、その理由は水難犠牲横死者を弔う供養塚であること、知夫村内十五カ所に存在していること、その内十二カ所の所在と碑文が判明したこと、日融上人は文久二年、五十三歳で入寂していることなどが、上記の資料で知ることができた。

宗門の流人僧の在住が、知夫村の子弟の教育に貢献し、帰依した人びとを督励して、経石と書写、題目碑を、水の遭難死者供養のために、島全体の集落や小島に建てさせたことは、いかに、法華経の信仰を浸透させていたか、当時の状況が推察されるのである。

前記、B寺およびD寺は、その教化拠点を継承する形で、廃仏毀釈の試練を越え、明治以後、弘法の志を継ぐ教師によつて寺院が建立されたとのことを、寺の縁起は伝えている。

法華経塚の所在を見ると、神社境内、薬師堂地内、大般若堂裏など、既存の祭祀地内に建てられていることは、法華経供養の尊さと、古来から尊崇してきた神仏と重層的に信仰された形態なのであるうか、寡聞にして浅学の論者には、想像の域を出ない。

妙経寺総代が、一宮神社の法華経塚の碑文には、「明治十五年〇〇四月八日建立」と読めると知らせてくれた。ま

た、浅島の法華経塚は、日露戦争、日本海海戦のバルチック艦隊乗組員犠牲者が漂着した所の供養塔であるという。してみると、十五カ所全部が日融上人代のものでなく、その後の建立もあり、日融上人の教化が、村人をして、法華経塚建立の慰霊方法を継承してきたものであろうか。

D寺の本堂新築が、檀家・非檀家の区別なく、島ぐるみの寄付で建てられた記録を見ると、漁村という特有の状況を考慮したとしても、日融上人教化以来の法華信仰が、この村に根強く伝承されてきたものではなからうか。

法華経塚は、村の郷土史跡として資料館に紹介されている以上に、住民の心に生き続けてきているように思えるのであった。

追記

島根県寺院調査は、昭和五十九年五月、現宗研より久住謙是調査主任、高橋謙祐・望月兼雄両所員、常岡裕道・神蔵義孝各研究員が参加し、二度にわたって行なわれた。調査には、島根県宗務所長米原実信師（本住寺住職）をはじめ、土井一顯師（光明寺住職・渡辺随皓師（妙綱寺住職）・加藤智士師（恵琬寺住職）・高梨恵兆師（法久寺住職）・地主孝純師（常妙寺住職）のご協力をいただいた。調査は横田・大田地区と隠岐島とに分け、横田地区は、渡辺上人の現状説明と案内のもとに、米原所長・土井上人が同行して調査を行ない、大田地区は、土井上人同行のもとに加藤上人の現地案内で調査ができた。また、隠岐島の調査には、米原所長・土井上人が同行し、高梨上人の現地説明と道案内で調査が進められた。特に土井上人には、多忙のところ宿泊のお世話をいただき、高梨上人にも車や宿泊の手数のご協力を得た。調査に当って各聖並びに調査寺院住職が与えられたご協力に対して衷心よりお礼を申しあげる。